魔女集会でよろしく

はなぼくろ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

恋愛クソ雑魚ＴＳ合法ロリ魔女が自身の弟子に堕とされるまでの話

目次

魔女集会でよろしくなんかするか　1
魔女集会になんて絶対行くもんか　10
魔女集会？　ナニソレ？　――――　19
魔女集会でよろしく（ヤケクソ）　26
過去編
出逢いと懺悔　――――　34

魔女集会でよろしくなんかするか

人生とは幾多の選択と決断の上で成り立っている。機会は幾らでもあるが、一度につきほぼ無限に存在する選択肢の中から一つしか選ぶことしか出来ない。

それが間違っているかそうでないのかは誰にも分からない。そして正しい選択を取り続けることが出来る人間はそういない。少なくとも私には出来なかった。

間違った選択を選んでしまった負債はいつかどこかで必ず取り立てられる。それは今日かもしれないし、明日かもしれないし、ずっとずっと先のことになるかもしれない。

兎に角一つ言えることは、私はどこかで重大な判断を誤ってしまったということだ。

「あー、すまん。聞き間違えたかもしれん。もう一度言ってくれ」

「何度だって言います。俺と結婚してください師匠」

ワンチャンに賭けて聞き直してみたけど聞き間違いじゃなかったわ。はは。

・・・・

・

どうしてこうなった！

何をどこで間違った！

何をどうしたら私が野郎に、それも我が子同然の愛弟子に求婚される羽目に合うんだ！

いや、なんか最近私を見る目が変だなーとは思ったよ？

でもさ、私はこいつがガキの頃から面倒見てるんだぜ？　親同然なわけじゃん。普通そんな恋愛感情とか湧くわけないじゃん。

偶に私達の関係を茶化してくるヤツがいたけどさ、「まっさかーそんなことあるわけないじゃん。頭沸いてんのか」って毎回流してたからね。

第一さ、私はこいつに対してかなり厳しく接してきた訳だよ。

自立を促すために冷たい態度とったり。

成長のために我が子には冒険させろと酷い目に遭わせてみたり。

甘えた態度を矯正するためにわざと辛辣なことを言ってみたり。

そんな訳だから嫌ったり、疎ましく思ってたりしてたってんならまだ分かる。だけどさ、まかり間違っても好意なんぞ抱く余地なんてあるわけが無いのだ。はずなのだ。

そうだよ。ある訳が無いんだ。

こりゃ性の悪い冗談だ。あまりのインパクトに混乱していたが、よくよく考えればわかる事だった。

はは、なにマジに受け取ってんだろ私は。割とマジで焦ったわ。人生で一番焦ったわ。くそっ。不肖の弟子の分際で師匠を手玉にとろうとは小賢しい奴だ。

まあ、一応確認は取っとくか。ありえないけど。万が一、いや億が一の可能性もないことはないかもしれないからね？

「なあ？　それって冗談――――」

言いかけて、やめた。

うわぁ、マジだ。

目が本気だ。

この眼は、いつぞやこいつが戦争なんぞに行くと言うから殺す気で止めようとしたときにも見た、覚悟を決めた人間の眼だ。不退転の決意をした人間の眼だ。

冗談でも「それって冗談だよな」なんて言えない。そんなただならぬ空気を感じる。

一瞬でもこの私をたじろがせるとは、逞しく育ってくれてカーチャン嬉しいよ。ホント。

はぁ。

・

・・・・・

考えろ！

この状況を打開することが出来る冴え切った一手を！

こいつを納得させつつ今の関係を変えずに済むような、そんな都合よく全て丸く収めることができるような理屈を！

「あのな……　馬鹿だろお前」

取り敢えず特に理由はないけど罵倒を浴びせておく。

先ずは乱されたこちらのペースを整え、逆にこいつのペースを崩し引き込む。そのためにちょいと強めの言葉でこの場のイニシアチブを強引にかすめ奪る。

未だに具体的な言葉は思いつかないが方向性は大方決まった。後は口に出るのに任せて考えながらしゃべくる。

「婚約だって？　そんなことが一体何になるというんだ。わざわざそんなことせずとも私は一生お前を手放すつもりはない」

なんたって私手ずから鍛えた魔法に理解のある貴重な労働力だからな。元よりこい

つが他所の女と所帯を持とうが一生扱き使う算段だった。というかそれがこいつを弟子と認める上で課した対価だ。

「つまりお前と婚約しようがしまいが、それが私に齎す変化なんぞこれっぽっちもない。メリットがないんだ。なら、んなクソ面倒なコトに拘う時間なんて無駄でしかない訳だ。分かったな？　この話はこれでお終いだ。二度とその話を振ってくるなよ。あと、ちょっと用事を思い出したのでここで失礼する」

適当なことを捲し立ててそれっぽい屁理屈を捏ね終えると、返事も待たず一方的に話を打ち切ってそのまま離脱する。最後はちょっと早口になったが一先ずこの場を去ることが出来れば後は如何様にも有耶無耶に出来る。

勝った！　第一部完！

「逃がしませんよ師匠」

だけどやはりというか、そうは問屋が卸さなかった。

私が立ち去るより早く、馬鹿弟子の大きな手がむんずと私の肩を掴んだ。振り払おうにもかなりの力が入っていて抜け出せない。この野郎ちゃっかり身体強化の魔法を使ってやがる。

「あんたが適当なこと言って逃げようとしてるなんてこと、こちとらハナから分かってるんですよ。何年一緒にいたと思ってるんですか」

「……　流石だな、我が弟子。師匠のことをよく理解しているようでなによりだ。ところでこの手離してくんないかな、めっちゃ痛いんだけど」
「なぁに虚弱っ子アピールしてんですか。あの事件以来暗殺がトラウマになっていつも硬化の術使ってんの俺にはちゃんと見えてるんですからね」
「ちくしょうばれてらぁ」
　こ、この野郎。私に対する人読みの精度が高すぎる！　なんかもう何言っても全部見透かされる気がしてきたぞ！
「い、いやしかしだよ。突然婚約とか言われてもすぐ答えなんて出せるわけないじゃん。それは分かるね？」
「ええ、そりゃまあ」
「それにだ、実際そんなことしたって今更何が変わるわけでもないしわざわざ婚約なんてだね――――」
「変わるものはあります」
　肩を思いっきり引かれる。いきなり来たもんだから踏ん張りも効かず、身体が引かれるのもそのまま、馬鹿弟子の懐に飛び込んでしまう形となった。
　痛ててと顔を上げてみれば、すぐそこにはボンクラな割には端正な顔つきの見飽きた面が。ちょっと背伸びすればキスできてしまいそうなほど近くにその顔はあった。

うおおおおお！　近けええええええええ！

咄嗟に離れようとするもいつの間にか腰に回されていた腕でがっちりホールドされていた。う、動けん。

「師匠」

「ヒゥっ」

ただでさえ近かったのに更に迫ってきた弟子のあほ面になんか喉から変な声が出た。

お前、私がスウェーしなかったらくっついてたからな！

そんな風に現実逃避気味に目の前に迫る阿呆を罵倒する私のことなどお構い無しに、馬鹿弟子はさらに続ける。

「俺はあなたのことが好きです。親愛の情なんかじゃなくて、一人の女の子として」

ひ、ひええええ。

こいつ正気か？　んなカッコつけたセリフ真顔で言い切るなんて並の神経じゃない。聞いてるこっちが恥ずかしくなってくる。おかげで顔が矢鱈と熱く感じる。

「だから、あなたにも俺を好いて欲しい。弟子とか息子とかとしてではなく、一人の男として見て欲しい。」

そこで気付いた。この野郎、震えてやがる。

多分、こいつも私達の関係がこれで壊れてしまうんじゃないかって内心ビビってるん

だろう。口じゃ達者なこと言ってんのも、ふとした瞬間に身が竦んでしまわないよう自分を鼓舞するため。

図体はでかくなっても、本質の部分はこいつはあの小っせえガキの頃となんら変わっちゃいない。臆病で弱っちいくせに、変なところで度胸がある。そんな馬鹿でどうしようもない私の最愛の弟子のままだ。

こいつは覚悟してる。今の関係が崩れてしまうリスクを犯してでも自分の気持ちを伝える決断をしてみせた。断腸の思いだったろう、怖かったろう。手に取るように分かる。

だからこそだ。師匠として、親代わりとして、こいつをここまで導いた人間として、こいつの一世一代の告白に対して、私は逃げちゃならない。

ｙｅｓにしろｎｏにしろ、私にはこいつの想いに、覚悟に、報いてやる義務がある。

いいさ。答えてやる。お前の師匠に相応しき⊠として毅然と答えてやる！

「あの、その。か、考えさせてください」

魔女集会になんて絶対行くもんか

突然ではあるが語らねばなるまい。私は転生者というやつである。

といってもその事自体について話すことは多くない。

前世なんていっても、珍しくもない平凡な青年の人生だ。特筆すべきことなんてない。普通の人よりもいくらか早死にしたくらいなんじゃないか、変わってるとこは。

転生の理由？

人間が生まれてきた意味とやらに答えが存在するのならそれがそうなんじゃないか。私は知らんが。気づいたら転生してたからなんとも言いようがない。

このことから唯一分かることがあるとすれば、もし神という存在が居るとすればそいつは輪廻転生的なサイクル法を採用しているということだろう。サンプルが自分しかいないから断言できないし、再現しようにも色々と覚悟がいるので当分検証しないが。

兎に角、言えることはうっかり死んでしまった私が特に理由もなく転生してしまったということだけ。記憶を保持したままなのは転生システムの不備とかそんなんなんじゃなかろうか、知らんけど。

とまあ、ここまでは前提の話で。話したいのはここからなんだ。

女の子に転生してましたと。まあ性別自体は単純に二分の一の確率だからそうなるのは分かる。転生といっても肉体の抽選は無作為だろうしね。最悪虫けらに生まれてた可能性すらあるんだから人間に生まれ直せたこと自体は僥倖だ。

問題は私が前世じゃ童貞だったってことなんですわ。

・・・・・・・

私は頑張った！

死ぬほど頑張った！

そりゃもう必死こいて、前世最大の汚点を払拭するために嘔心瀝血の思いで奔走した！

だって、性の悦びも知らず死ぬなんて、あんまりにも惨めじゃないか。それも二代に渡って童貞なんて、私には耐えられない！

え？　でもお前女の子じゃんだって？　何言ってんだ私は男だ。身体の話？　わたしゃ男色の趣味はないんじゃ！

そんなわけで、だ。今生の世では科学技術の代わりに定着してた魔法とかいうクソ便利ツールを弄り回して、男に戻る為に必死こいて研究に励みましたとも。

性転換の為に必要な分野には片っ端から手を出したし、未開拓の研究分野にも手を付けた。

なんか想像よりも研究が難航して普通に生きてるだけじゃ時間が足らんということで研究の副産物を利用して寿命を克服したりした。

そんなこんなで２００年経った現在。私は未だに女の身体のままで、木製のデスクに突っ伏して頭を抱えていた。

ここは王国の宮廷魔術師である私個人に宛てがわれた執務室兼研究室。取り敢えず魔女っぽくそれらしい雰囲気を出そうと色々と怪しげな物品を持ち込んだおかげでほの暗くジメジメした空気を醸し出している。秘密基地大好きっ子な私としてはそこそこ気に入っているが、弟子からは不評をいただいている。

そう、弟子だ。あの馬鹿で阿呆でノロマな小便垂らしのアンポンタンスカし野郎！

今なお私の頭の中をぐしゃぐしゃにする私史上最大の頭痛案件を投下しやがったクソ地雷野郎！　踏み抜いたのは私だけどな！

奴のせいでここ数時間ばかりロクに頭が回らん。やらねばならんことは多いはずなのにいっこうに手が進まん。見飽きたはずのあの面が頭の中でチラつくもんだから落

ち着けやしない。
それもこれのあの野郎がよりによって私に告白をかましてきたからだ。
あー、分からん。いくら考えても分からん。なぜ私なのか。
あのすけこまし野郎の周りには奴のことを少なからず想っている女共がそこそこ居たはずだが、なぜそっちには目もくれずこっちに突っ走ってきたのか。これが分からない。
嫁が選り取りみどりで我が弟子も安泰だなー羨ましいなーとか前世の自分と対比してもやっていたというのに、不意打ちかまされた気分だ。
でもまあ、そこは重要じゃない。奴が私のどこに惚れたかなんて、どうでもいい訳じゃないが考えたって答えなんか出るわけが無いのだから考えるだけ無駄だ。
大切なのは私がどうしたいかだが。
「おい、スキエンティア。この間の件で話があるんだが――何をしているんだお前は」
そこまで思考を巡らせようとしたところで、執務室のドアが開いた。ノックもせず当然のごとく中に入ってきたその男は机に伏せて唸っている私を見て数秒固まるとそんなことを聞いてきた。
ちなみにスキエンティアとは私の姓だ。フルネームはマーリン・スキエンティア。前世の世界の人間なら分かるだろうが本名じゃあない、偽名だ。一応偽名を名乗っている

理由は色々とあるが今は置いておく。
「何をしているか、か。見れば分かるだろう戯け」
「見て分からないから聞いているんだろうが、そんなことも分からないお前の方が戯けだ。戯け」
「あの、ヨッドさん。扉の前で口喧嘩しないでくれませんか、私が入れないです」
この一言多くて頭の中が幼稚園から成長していない早口のおっさんがヨッド・コクマー。この国の軍事担当宰相。こんな奴が宰相なんて世も末だ。
そしてこいつにくっ付いて来た女の方がキーター・ステファノス。コクマーの護衛件介護担当。庇護欲を掻き立てるような可愛らしい顔をしたゴリラだ。体格自体は華奢だけどれっきとしたゴリラの一族だ。多分出る作品間違えてると思う。
「つーかノックぐらいしてから入ってこいっていつも言ってるだろうが。そこんとこしっかりしろよな、キーター」
「えっ」
「そうだぞキーター。一体何年僕の護衛をやっているんだ？　しっかりしてくれ給え」
「えっ。あっ、もしかしてこれ私が悪い流れなんですか？」
握り拳で手のひらを叩いて頭から豆電球を出しているキーターを無視して私はコクマーの方を向いて本題に入ることにした。

「コクマー。何やら相談事が有るらしいところ悪いが、今の私はかつてない難問に直面していて他のことに手が着かない。緊急の用なら聞くが、そうでないなら後にしてもらいたい」

コクマーは腐っても宰相で、私は宮廷魔術師だ。国防という一点で、私とこの男の業務はある程度被るところが多い。だからこの男が私に用件を振りに来たということはつまりそういう事なのだ。

国営の一端を担う者として、その公務に私個人の私情を挟んで事態を遅延してしまうことは出来ない。が、ある程度私のパフォーマンスが落ちていることも事実なのでその上で私を動かすべきかはコクマーに判断させることにした。

コクマーはそのメンタリティこそガキみたいな奴だが、仕事は一流だ。政治事に疎い私よりもこいつの判断力の方が余っ程信頼できる。腹立つけど。

「いや、そこまで急いではいない。そういうことなら出直すが、一体何に手を焼いているかくらいは聞いておこうか」

「んにゃ、人に話すことでもないよ。まあ公務とかとは別の個人的悩みだ。早いこと片付けるから安心しろ」

「ほう、偏屈女が珍しいな。なんだ、自分の弟子にでも告られたか」

「ヴォエフゲハッゴッハゴッホゴッホ」

思いっきり嘘せた。か、完全に油断してた。この野郎、人が珍しくちょっとシリアスしようとしてたのに、意識外から予想だにしない変化球ぶち込んできやがった。つーかなんで知ってんだよ！

「お、お前。その話を一体どこで……」

「は？　図星だったのか。とすればさしもの奴もとうとう腹を決めたと見える」

「え!?　やっとエル君告白出来たんですか!?　ヨッドさん、私ちょっと今から皆さんに言いふらしてくるんでお先に失礼させていただいてもよろしいですか？」

「待て待て待て色々と待て！　は？　どういうことだ？　説明しろコクマー！」

なにその「やっとかよ、待ちくたびれぜ」感。え、なに。皆知ってたのか？　知らなかったのは私だけなのか？

あ、ちなみにエルってのは我が弟子のことね。

「説明も何も奴さんの言った通りだが？　というか、説明すべきなのはそっちでは？」

「マーリンさん！　詳しく！　告白の状況をもっと詳しく細部まで事細かに教えてください！　シチュエーションはどんなだったんですか!?　なんて言われたんですか!?　もうキスとかはしちゃったんですか?」

「ええいうるさい五月蠅い。もう帰れよお前ら！」

なんなのこいつら。なんで揃いも揃って恋愛脳なの？　キーターに至ってはノリが

もうぜえんだけど。人の執務室で騒がないでください！
「いやいやいや。スキエンティア君、君は君の私的な事情で公務をふけようとしてるんだぞ？　ならせめて事の顛末を話すくらいの説明責任はあるんじゃないのかと僕は思うんだけどね」
「お前、絶対面白がってるだけだろ」
「いやぁ、なんのことか分かりませんなあ」
　キレそう。地味に正論で突いてきて逃げ道潰してくんのほんと性格が悪い。こいつのこういうとこ嫌い。全部嫌いだけどな！
「で、実際のところどうなんだ。せめて返事はどうしたのかくらい教えてもらわねば僕も出るとこに出なきゃならなくなる」
「勿論ＯＫしたに決まってるじゃあないですか！　ね、マーリンさん。当然答えは『はい』ですよね！」
「もうお前黙らないと無理やり口を閉じさせるぞ」
「やれるもんならやってみてくださいよ。その程度じゃあ人の口に、それも私の口に戸を立てることなんて出来ないんですからね！」
　私の魔法じゃマジでこいつの口塞げないから困る。物理的に。
　この脳内お花畑パープリン女、頭の出来と実力が乖離してるから誰もこいつの横暴を

止められないんで皆から嫌われてる自覚ないんだろうか。
いつもはコクマーがストッパーになってるからまだいいが、今日はコクマーも止める気ないどころか一緒になって私を追い込もうとしてるからどうしようもない。あれ？
もしかして私詰んでないか？
結果的に言えば私は諦めた。ピンク頭二人の猛攻を前に私に出来ることは殆どなく。せめてもの抵抗も虚しく、職権を乱用した洒落にならない脅迫や圧倒的な物理的暴力の前に虚しく屈してしまった。
それから私は判決が下されるのを粛々と待つ罪人のような気持ちで、二人にその時の状況の仔細を私の心情を交えながらポツポツと語ることになった。
死にたくなった。

魔女集会？　ナニソレ？

考えさせてくれ、そんな言葉を一世一代の告白をかましてきやがった馬鹿弟子に私は返した。

それは決して私が最後の最後で日和って尻込みしてしまったという訳では断じてない。ないったらない。ちゃんとした、相応の理由がある。

あのとき、正直なところあれ以上詰められていたら私は「はい」と答えていた可能性がある。それだけ本気で焦っていたし、あいつの空気に呑み込まれていた。勢いに押されてそういう返答をしかねないと私は思った。だから時間をくれるように頼んだ。

もし奴がただ単に私とそういう事がしたいだけなのであれば、その方が奴にとって都合がいい事だったのかもしれない。が、私の知っている馬鹿弟子は決してそういう下卑た人間ではない。

あいつが私に望んだことは、そんな口から思わず出たような言葉なんぞでは決してない。

言葉通りだ。今どき純情で恋愛にメルヘンを夢見てる奴は、私に真実の愛なんて笑っ

ちまうようなものを求めてる。本心から愛して欲しいなんて馬鹿げたことを求めてる。

正直に告白しよう。私はあの愚かな弟子を、エル・プルプレウスを愛してはいる。だがそれは恋愛感情ではない。親愛とかそういう類の、家族を愛するのと同列の愛だ。

しかし、それは奴の求めているものじゃない。男として見て欲しいと、奴は言っていた。

私は男だ。その意識は女の身体を得ようが長い時のなかで生きようが、擦り切れることなく私という存在の中で根を張っている。

そんな私にとって、小さかったときからずっと面倒を見てきたあいつを異性として見るには少々きつい物がある。

私としてはあの繊細で傷つきやすい弟子がそれを望むなら、叶えてやりたい気持ちは山々だ。それは奴が私にとって掛け替えようもない大切な存在であるからだ。

だからこそ私は奴に対してだけは誠実にいなければならないと思っている。

同情や憐憫の気持ちで形だけ装うのは簡単だ。だがそれは奴の望んでいるものとは別なものだ。侮辱ですらある。

奴には私の本心を、真実を伝えなければならない。例えそれで私が傷つくことになったとしても、だ。それが今ある関係を壊すことになっても前進することを選び、覚悟を示したエルに対する私の誠意だ。

「よう、こんなところにいやがったか」
　人の不幸とか悩みとかを啜って生きながらえるハートレスモンスター二匹からようやっと解放された私は再び馬鹿弟子の前に姿を表していた。
　こいつに抱かれて小っ恥ずかしい告白のセリフを聞かされたときは思わず動揺してたから返答するや否や股間を蹴っ飛ばして拘束が緩んだ隙に裸足で逃げ出してしまったが、今はある程度覚悟と心の準備を済ませておいたおかげでこいつの前に来ても顔ちょっと熱いくらいで済んでいる。
「あ、師匠。よく俺がここにいるって分かりましたね」
「はっ、私が何年お前の師匠やってると思ってんだ。お前の考えてることくらいなんでもお見通しなんだよ」
「その割には今朝は今まで見たことないくらいの慌てようでしたがね」
「それは忘れろ」
　こいつ……　毎度毎度口だけは達者な奴だな。一回師匠として、こいつに弟子としての振る舞いというやつを叩き込んだ方がいいんだろうか。
　まあいいか、今更って感じだ。
「にしても、ズボラな師匠にしては来るのが早いですね。もうちょっと時間かかると思ってたんですが」

「私とてもうちょい熟考を重ねたかったんだがキーターの奴が煩くてな。お前が凹んでんじゃないかだと。だからわざわざお前のしみったれた面を拝みに来てやったんだ、感謝しろ」
「えっ、ステファノスに話したんですか？　ああ、大方自分で墓穴掘ってバレたってとこですか」
「お前の私に対する理解力どうなってんの？」
　当たりすぎてて怖いんだが。一緒に暮らしてるからって普通そこまで分かるもんなの？　我が弟子ながら末恐ろしいぜ……。
「それで、俺のところに顔出したってことはちゃんと返答を聞かせてくれるんですよね」
「……　まあ、な」
　若干言葉を濁した私の回答に奴は眉を顰めた。断られると思ったのか、握り拳に力が入ったのが見える。まあ、ビビるのは分かるが、それはこっちも同じことなんだよなあ。
「その前に大切な話がある。今までお前には聞かせていなかったことだ。それを聞けば、お前も考えが変わるかもしれない」
「……　なんです？　それは」
　私の前振りを聞いて奴が見せたのは怯えではない。僅かな、怒気。心外だとでも言わんばかりに、私を見るその視線が細められた。

ありえない。とでも思ってんだろうな。それくらい私を想ってくれている気持ちが強いってことなんだろうが、喜ぶべきなのか呆れるべきなのか。悪い気はせんが。

まあいい。さっさと語っちまおう。その方が気が楽だ。

そうして口を開こうとして、

「ア」

喉に何かが突っかかったように、声が出ない。思わず手で喉を押さえる。私の動揺に馬鹿弟子の視線に訝しむような色が混じる。

触診した限り異常はない。異物感も感じない。とどのつまり、声が出ないのは。

――ここにきて今更足が竦んじまったのか私は。

なんとも情けない話である。私にはどうやら覚悟というものが足りていないらしい。今ある関係を壊すのが、馬鹿弟子の、こいつの信用を失うのが怖くて怖くて堪らないらしい。

そもそもな話、私は最初から満足していたのだ。恋人同士でもない、親子という間柄でもない。かといって他人でもない。家族以上の信頼関係で結ばれているという、こいつとの現状に。

不満はなかった。これがこのまま続いていくもんだと思っていたし、そうするつもりだった。曖昧な関係でいいと思っていた。

だがこいつは、止まりかけていた歯車を動かすことを選んだ。前進のために、己の欲求のために、私達の関係に白黒つけるために。

迷惑な話だ、そんなこと私は望んじゃいない。なぜこのままじゃ駄目なのか。不満なのか。

怖かった。私の返答如何でそれが砂上の楼閣のように崩れるんじゃないかと、戦々恐々としていた。一度本当に壊したことがあったからこそ、その恐怖は本物だ。

だからそれを先延ばしにした。こいつの為だなんだと言ってはいたが、結局、それは私のためだった。

だけれどいつまで言葉を濁したところで動きだした歯車は止まることはない。そんな態度が不和を産むかもしれない。そう思ったから私は答えを急いだ。

何もかも自分のため。

私はかねてからこの馬鹿弟子を臆病だなんだと謗ってきたが、本当の臆病者は私の方だ。

だけどそんなことは最初から分かってる。

手前のことは手前が一番分かってる。そんなこと承知でここに来た。馬鹿弟子のためなんぞではなく自分のために、間違えてしまわないように、答えを出す為に、私という人間の全てをさらけ出して清算する。

ここで逃げればこの先一生、同じような選択を迫られることがあってもずっと逃げ続ける。

これは良い機会なのだ、自分を成長させるために。例えどんな結果になろうと、後悔することになろうが、今日という日は私の糧となる。

多分、私の真実とやらは決して弟子にとって要らんものだ。知らなくてよかったことだ。誠意なんぞと宣ったが結局のところこれは私のエゴだ。

だがそれがどうした。第一、そもそもなんで私がこの馬鹿弟子に配慮して自分を殺さなきゃならんのだ。そんなのクソだね。

そもそも最初にぶっ込んできたのはこいつなのだから私が我慢してやる必要などハナからない。おあいこさま。

だから、ビビる必要なんぞない。

「私な、実は男なんだよ」

ああ、でも。やっぱり怖いもんは怖いわ。

魔女集会でよろしく（ヤケクソ）

私がこれまで誰にも打ち明けたことのなかった真実の告白を聞いて弟子は呆然と私を見やり瞬きを二三度挟むと、顎に手をやり目を閉じて暫く沈思黙考にふけり、何やら頷いて手を叩くと私に鋭い視線を向けて言った。

「なるほど、さっぱり理解出来ないということが理解出来ました」

「だよねーそうなるよねー　仕方ねーよそらそうなるわ」

私もコクマーに「実は僕、女の子だったんだ」なんて突然言われてもロクな反応をしてやれる自信はない。っーかどうでもいい。

でも実際、コクマー云々は置いといて突然こんな真相を聞かされても困惑が勝つのは当たり前だ。何言ってんだこいつってなるよ、当然。

「あー、詳細については更なる混乱を招く恐れがあるから省くが。まあ要するに私のガワは女だが中身は男だという認識で構わん」

自分で言ってても訳分からんな。傍から見たらある意味精神的な病状を患ってるように見えんのかな。

「なんとなく分かってきましたが、それって遠回しに断ってるって認識でいいんですかね。そうならそうで直接そう言ってくれればよかったのに」
「えっ、いや、あの。そうじゃなくて」
　えっ、あっ。もしかして断る為の方便だと思われてる？　いや、でも普通はそう受け取っちゃうのか。ど、どうしよ。
「えっと、そういうんじゃなくて。その、私が男でお前は嫌なんじゃないかっていう」
「なんでですか？」
　なんでって、なんで？　なんでこいつこんなケロッとしてんの。もう少しこう、葛藤すべきことがあるんじゃないの。なんで私の方が追い詰められてるみたいになってんの？
　わ、訳が分からない。
「いやだって、私に、その、言ったじゃないか。女の子として、えー、見てますって。だから」
「あー、それでらしくも無くうじうじと悩んでたんですか。ありゃちょっとした方便みたいなもんですよ」
?????!?
　え、どういうことなの……。弟子の考えてることが全く分からない。さっぱり

微塵も理解が追いつかない。

なぜ稀代の魔法使いのこの私がよりにもよって自分の弟子にこうも良いように転がされてるんだ。おかしい、こんな世の中間違ってる……。

「それってどういう――――」

「昔親友に教えて貰ったんですよ、ガードの硬い女の人を口説くには自分がその人をちゃんと『女の子』として見てることをアピールするのが大事なんだって。それでそういう言葉を選んで使ったって訳です」

こ、こいつ。なんか手馴れてないか？　二百年＋？α？生きてる私よりも恋愛経験が豊富そうに見える。なんだかそういう方面での話では絶対にこいつには勝てないだろうなと思ってしまいそうな風格すらある。

もしかしてどこぞの女が私の弟子に知らんうちに手ぇ出してたんじゃないだろうな。どこのどいつだ。結果的に私を追い詰めた遠因となったそいつを見つけ出して血祭りに――――。

てか、こいつ何言ってんだ？　焦りすぎて半分近く聞き流してたけどよく聞いたらこいつの言葉は――――。

「つまり、それって私が別に男だったとしても構わないってことなのか？」

「まあ、そうなるんですかね。結果的には」

「……　お前もしかしてソッチの気が」
「違いますよッ！」
　ええ……。いや、まあ私としてはこいつがゲイだろうがバイだろうが特に思うことは無いんだけどさ。そういうのも個人の持つ立派なポリシーだと思うし。
　多少ショッキングな事実だが、そういうところも引っ括めて受け入れてやる寛大さくらいは私も持ち合わせて――――。
「いや、ホント違いますからね。なんか黙りこくって妙な事考えてるんでしょうけど、マジで違いますからね。僕の性的趣向は至ってノーマルですから。第一、僕は男かどうかなんて分かっていないときに師匠に告白してたでしょ」
「なんか必死になって否定してるとこがガチっぽい」
「じゃあどうすりゃいいんですかッ！」
　ははっ。なんかペース掴めてきたな。最近は会話のイニシアチブを取られることが多かったが、基本的に私は人を弄る方が好きなんだ。優越感に浸れるから。
　まあ表情見るに本当に違うんだろうけど、前にこいつにガチ惚れしてた馬鹿な野郎が一人居たからなあ。割とホントなんじゃないかって疑ってしまうところもある。
　とまあ、そんな風にからかっていたら突然「師匠」と呼びつけてきた。なんだ、開き直ったかつまらん。

「なんだ」
「俺は師匠のことが好きです。でもそれは性別がどうとかそういうのじゃあない。男だとか女だとかは二の次なんです。だって俺はあんたっていう人間に惚れたからです。マーリン・スキエンティアっていう一人の人間が好きなんです」
「お、おう」
　あ、相変わらずなんちゅー小っ恥ずかしいセリフを吐けるんだこいつは。メンタルおかしいんじゃねーの。なんかまた顔が熱くなってきた。勘弁してくれ。
「そういう師匠こそどうなんですか」
「な、なんだよ」
「だってさっきから俺がどうとかで自分がどうしたいかなんて一言も言わないじゃないですか。師匠の気持ちを聞かせてくださいよ」
　水を向けてきやがったな私に。でもまあ、こいつが問題ないってことならそういうことになるか。正直、私の一世一代の告白をサラッと流された気がせんでもないので釈然とせんが。
　私がどうしたいか、か。難しい問題だ。私自身、それを把握出来ている訳では無い。だからいっその事さっきので弟子が諦めてくれた方が寧ろ気が楽だった。事の成り行きの意思決定を他人任せに出来るんだからな。

だが結果的に、私達の関係性の進退は私の一存にかかることになった。プレッシャーがやばい。

しかし私は――

「分からない」

弟子が眉を顰める気配を感じた。だが、それが私の本心だった。

「分からないんだ。いや。私は、お前がそうしたいんならそうしてやりたい。お前がそれを願うなら私もそれを叶えてやりたいとは思っている。だが――」

「だけど、それは師匠が自ら望んでいることじゃない」

私が今回の件を比較的前向きに検討しているのは馬鹿弟子がそれを望んでいるからだ。だけど、それを私が腹の底から望んでいるかっていうとそうじゃない。そこに私の意思は介在していない。

「確かに、ただ婚約するだけならそれでもいいでしょう。でも、俺が師匠に求めているのはそんなことじゃない」

「分かってるよ。だから、こうしようか」

言いながら近付いて、頬を撫でてやる。気付いたらいつの間にかこいつは私よりも大分デカくなっていた。こうして顔に手をやるだけでも足元までよって足を伸ばさなくちゃならん。成長を喜ぶべきか、忌まわしく思うべきか。前者か。

「お望み通りお前と式はあげてやる。それで納得出来ないと言うならお前が私を本心から惚れさせてみろ」

「俺が」

「ああ、だが私は手強いぞ？　さっきも言ったが心は男だからな。野郎は対象外だ。それでも諦めないというのなら――――お前が私に惚れたように、男の私が思わず惚れてしまうくらい立派な人間になれ。私を本気にさせてみろ。それでいいな？」

はっきり言って、こいつは今のところ頼りない。私より弱いし、守ってやらにゃならんという気持ちの方が強い。庇護対象としか思えん。

だから強くなって欲しい。私の手など要らないほど強くなって欲しい。心配をしなくてもいいようにして欲しい。

そんな私の想いが伝わったのか、馬鹿弟子は一度眼を閉じると、力強く頷いた。言葉はなかったが私は妙に安心した。

まだこいつがどうなるか分からないが、多分大丈夫だと思った。きっと強くなってくれるだろうと、漠然とだが確信した。

いつになるかは分からないが、いずれこいつは私が居なくても一人でやっていけるようになるだろう。

安心した。例え私が道半ばでくたばることになっても、この世にこいつ一人だけ残し

ていくことにしまったとしても、きっと安心して逝ける。

過去編

出逢いと懺悔

「なるほど、なぜ上手くいかないか分からないことが分かった」

山積みになった本やら走り書きのメモやらで足の踏み場もないほど埋め尽くされた薄暗く黴臭い部屋の一角で蠢いた小さな影は、何やら深遠な哲学めいたことを呟いた。

それからソレは手元に持っていた細々とした機器を放り捨てると、座椅子代わりにしていた稀覯本の山に転がって苛立ちを隠そうともせず頭を掻きむしり、暴れた。

キュビズムをかくやと言わんばかりに身体を捻って全身で苦悶を表現するソレはよく見れば美しい少女のようであった。

歳の頃は十代前半だろうか、未成熟な四肢は軽く握れば手折れてしまいそうなほど細く、シミ一つない白磁の肌を惜しげも無く晒す彼女の姿はその気がない人間でも倒錯的な思考へ誘ってしまいそうな程に幽鬼的な妖艶さを醸し出している。

しかしながら彼女の気性だろうか、身嗜みを整えることを随分と怠っているようで、蚕の紡ぐ絹を思わせる流麗な銀の髪束は見事なまでにボサつき、精巧な人形の造詣を思

わせる完璧な美貌を誇るはずの色白の細面は朝から洗っていないのだろうか、青白い。
誰がどう見ても本来その少女が備えている筈の絶世の美貌は著しく損なわれていた。それでもなお、思わず振り返ってしまいそうなほどの美しさは健在だが。
唐突ではあるが、彼女には前世の記憶というものが存在する。
なぜそんなものが存在するのか、特にこれといった理由で彼女に思い当たる節はなかった。生きものがなぜ生まれてきたのかなんてことに答えられるやつがいるなら分かるかもしれないが、少なくとも彼女は違った。
寧ろ理由なんてハナからないというのが彼女の見解であった。神の気まぐれというやつだろう。とどのつまり、推測に足る根拠もないことを永遠に考えていても時間の無駄だという事だ。
その前世の記憶にしたって彼女にしてみればさほど重要性のあるものでもない。
しょうもない人間が、しょうもないことを考えながらしょうもない人生を送り、しょうもなく死んだというだけの淡白な記憶。
それが彼女の人格形成に深く関わっていること以外はこれといって特別なものでもない。寧ろ忘れたいことの方が多い。消せるもんなら消したい。
だが一人の人生を鮮明に綴った記憶の追体験は彼女の人生を籠絡し、強迫観念に近い目的を抱かせるに至った。

彼女はそれを果たす為にこうして日夜、膨大で難解極まる文字の海に沈んで研究に耽っていた。

閑話休題。

いつまでそうしていたのだろうか。本の上で寝転がって無為に戯れていた彼女はふと覚えた空腹を自覚すると、頭を抱えるのをやめて起き上がった。

「……　飯にするか」

食事を疎かにするほど彼女は切羽詰まっていない。

以前はそれくらいのことは平気でやるくらいには研究熱心ではあったが、今はそこまでやる気にはなれない。

理由としては研究が行き詰まっていて時間を掛けても相応の成果を得られなくなったことと、効率を考えれば寧ろ休憩を挟んだ方がいいと気付いたからだ。

凝り固まった思考力をクリーンにするのもそうだし、何より頭を使ったので甘いものを脳が欲している。

さて、何を食おうか。そうやって思考を巡らそうとして、

「はぁ、またか」

と、少女は窓の外を見遣りながら呟くと、そそくさと玄関の方へ向かう。

コートスタンドから少女が着るにしてはやや大きすぎる黒ずくめの外套を手に取っ

て羽織り、そのまま扉を開け外に出た。

既に昼時だというのに、そこは一寸先も見通せないほどの深い霧に覆われていた。標高の高い山岳地帯であればままあることだが、それとは違い、これは人工的なものだ。

結論から言ってしまえばこれは少女の生み出した霧であった。人払いも兼ねているがそれ以上に、”外”からの監視対策に敷いたものでもあり、接近する存在を知覚するための鈴縄でもあった。

霧の水滴一粒一粒がそれらを生み出した少女と魔術的な繋がりを形成しており、何かしらと接触するとその情報をフィードバックとして彼女に返す。今回それに何かが引っかかった。

ああ、やっぱり。

自宅近辺に張り巡らせた探知魔法に人が引っかかったのを感じて来てみれば、やはりといかそこには小さな人影があった。

濡れてぬかるんだ地面に伏して、荒い呼吸を繰り返すソレは見れば随分と年端もいかない子供のようであった。

実際、よくあることではある。

少女の棲むこの山奥の近辺には人里はなく、また魔女が出るとかいう噂のおかげなのかこの辺りは姥捨山みたく扱われており、要らなくなった人やらを置き去りにしていく

輩は少なくない。
見ればこの少年も随分とみすぼらしい格好をしている。頬骨が浮き出てるところを見ても食事すらまともにとれていなかったように見えた。生傷だらけの彼の裸足を見るに靴も履かずにこの獣道を歩いてきたのだろう。
何処ぞの奴隷か何かだろうか。まともな扱いを受けていなかったことは確かだが。
兎にも角にも、このまま放っておく訳にもいくまい。そう考えて少女は少年をその細腕で危なげなく持ち上げると、服が泥で汚れるのも構わずそのまま肩に担いだ。
少年が年相応に小柄であることを加味しても少女が担ぐには荷が重いようにも思えるが、一応カラクリはあることにはある。
魔法。そう呼ばれる技術がこの世界にはある。一口に魔法と言っても様々なものがあるし、少女の前世の知識とは違って制約やらなんやらが矢鱈と多くてなんでも出来るわけではないが、それでもこうやって人を軽々と抱える程度のことは苦もなく出来る。
とどのつまり少女は魔法使いであった。
どう考えても先の話の魔女とは彼女のことである。それを自覚していて、どうやら人がここに放棄されていくのは自分にも責任があるようであるから彼女は度々こうやって得にもならない人助けをやっている訳であった。

＊

「ふひぃ、疲れたァ」

ソファにどっと倒れ込むように身を預けると、少女は盛大に溜め息をついた。

思ったよりも疲れた。運ぶの自体は苦にもならなかったがそこからが大変だった。

先ず、先程の少年はかなり弱っていた。道端で倒れてるのだからそれは当たり前なのだが、その原因が栄養失調や脱水症状に起因するものだからただ休ませればいいというものでもなかった。

意識のない人間の口元に食い物やら水やらを持っていっても飲み込む訳が無い。点滴があれば楽だったのだろうが、そんなものが家にあるわけもない。

結局、魔法で流動食を操作して無理矢理少年の体に流し込むことにしたがこれが大変だった。なにしろ途中で変な器官に入ったりしたら困る事になる。外の霧と同様のものを少年の体内に突っ込んで、そこから体内の構造を把握しながら慎重に流動食を突っ込んだ。かなり繊細な作業を要求されたためか精神的な負担が凄まじく、そのツケをこうしてダラけることで払っている。

（相変わらず、何やってんだろうな私は）

王国を追い出されて以降、この誰も訪れぬ庵に身を潜めるようになってそれなりに時

間が経つが、それからこれといった成果も上げられず、偶に迷い込む連中を助けるだけの時間が続いている。

研究の成果に時間が掛かるのは仕方のないことだが、後者については本当に無為な行いだ。感謝されることはあるが稀に罵倒や暴行を受けることもある。割に合わない。

それでもこうして助けてしまうのは見捨てるとあまり良くない気分に陥るのが分かってるからだ。つくづく損な性格だと思う。

にしても、子供が迷い込むとは珍しいな。

そう思ってこの家唯一のベッドを占領する少年を端目で見やる。随分と落ち着いたようで、規則正しい寝息を立てて熟睡しているようだ。

ふと懐かしい思いを抱かされた。なんだったか、見覚えのある。あぁ、そういやアイツもこんな顔してた時期が――――。

瞼の裏でいくつかの情景がフラッシュバックされる。懐かしい顔、顔、顔。どれも自分に向かって同じ笑顔を向けていた。そして忌々しいあの記憶も。

「最悪だ」

額を押さえて天井を仰ぐ。あれからかなりの時間が経っているというのに未だに引き摺っている自分がいる。未練がましい。反吐が出る。

納得した筈だ、自分には救えない命だと。納得した筈だ。何故今更後悔なんて。

そうやって自分に言い聞かせていると、背後の気配が呻いた。振り向くと、先程まで寝ていた少年が薄らと目を開け始めているのが見えた。

「よお、目が覚めたか」

いつぞやも同じことを言ったことが思い出されて、嫌な気分になった。